

京阪神東雲

鳥取県立鳥取東高等学校同窓会

東雲会京阪神支部会報●第16号

URL <http://www.ab.auone-net.jp/~sinonome/>

連絡先 岡田俊一(山脈12回)

神戸市垂水区神和台2-2-9

母校の近況、ビデオで紹介

豪華に平成24年度総会開催

24年度は、ホテルコムズで開催されました。同期が同じテーブルで歓談。今年もぜひ、総会で同期の方とお誘いあわせご参加を！

今年度の会場は評判の神仙閣です

京阪神東雲会会員の皆様、私は今年度の当番幹事を務めます山脈30回の大西紀子と申します。

私達はそれぞれに様々な理由で故郷を離れ、この地で生活しております。同じ学舎で学んだ者がこの地で一つになれますのも、ひとえに諸先輩方の並々ならぬご努力のたまものである事を知りました。その努力を無にしないよう、準備を進める所存でございます。

我々京阪神東雲会山脈30回の幹事は総勢9名、そして在鳥取の山脈30回の幹事数名も我々を支えてくれています。

昨年度山脈29回の先輩方が企画なさったホテルコムズの総会では、あちこちの席で鳥取弁が飛び交い、笑顔があふれ、そして美味しいごちそうをたっぷりと頂ける、本当に素晴らしい会でした。何より29回の皆様が一番イキイキと楽しそうになさっていたのが印象的でした。次の総会では、会員の皆さんに楽しんでいただける総会となりますよう努めさせて頂きたく存じますが、我々30回の幹事にとりましても、他の回の皆様以上に楽しめる会をめざして頑張って参ります。時は11月16日(土)12時半～場所は大阪駅前第1ビル12F神仙閣です。どうぞ皆様ふるってご参加下さいませ。

(山脈30回・当番幹事 大西紀子)



返信はがき(平成24年度)の 近況報告から

同窓生OB諸兄姉の消息をお知らせします。本誌も16号になりました。皆さんの“元気のもと”を返信はがきの近況欄でお寄せ下さい。

柏葉★おせわさまです。堺市近辺で、滝、船、河などの絵のお好きな方、お立ち寄り下さい。仁徳御陵は近くにあります。その見物を兼ねて、どうぞ。(18/長澤卓重) ★元気に暮らしております。妻との二人暮らしも長くなりました。月、4、5回のゴルフを楽しんでおります。2中時代の同期の友が出席されれば私も出たいと思いますが…。(18/佐々尾昭)

★毎年、東雲会の時期が来れば、第一回鳥取県駅伝競走で優勝したときのことが思い出されます。(22/藤田忠雄)

山脈★法事で三年ぶりに鳥取に帰り、砂丘で砂の美術館を観、賀露で美味しい海鮮丼を食べました。真、故郷は良きかなです。(2/金谷充清) ★すっかり古代卒業生の一人となっていますが、幸い、健康に支えられて40年来の書道指導を生涯現役のつもりで続けています。「15号東雲会近況報告に山脈3期生の消息が無く寂しく思いました。(3/川岸美智子)

★1973年からの山脈3回生京阪神同期会も35回を数え、今では全国版となつて旧交を暖めております。傘寿の仲間、頑張りましょう。(3/太田勉)

★会社定年まで40年それから17年間サラリーマンを続けています。朝7時25分自宅出発し通勤電車に揺られて出勤です。今年の幹事と25歳も違います。幹事はご苦労様ですが、この会は永遠に続くことを祈っております。(4/小路一完) ★元気で夫婦旅をつづけています。春の

北信州に続いて10月には鳥海山、奥会津11月は赤城山、吾妻渓谷を歩く予定です。(5/松下泰治)

★関西山脈6期の10名弱の世話役との会合は今や逢瀬であり、友を好う度合が都度増している。高校時代と一緒に過ごした友は何故かそんな気持ちにさせてくれる。大事な大事な宝物だ、それが突然一つ欠けた。寂しくて、悔しくて断腸の思いである。加齢と共に避けられない事態であっても再度味わいたくない、この想いをかなえてくれ!(6/久永浩) ★最近は鳥取賀露港の“わったいな”にドライブを兼ねて新鮮な野菜、果物、米を買いに行きます。(8/下村美津江) ★案内を頂き「近況」で筆が止まつたままでした。今までどおり重き荷を背負いて日一日を歩み続けよう、その先にのみ良きことがあるのだと言いきかせて。(8/三浦久志) ★先月、北アルプス室堂から薬師岳をめざしましたが、悪天候で断念。来年こそはと思っております。(9/垣本信夫) ★暑かった夏も終わり、秋を見つけに明日香に行き、

彼岸花、すすき、赤とんぼに出会いました。自然に出会えることに幸せを感じまだ歩きたいと思います。(10/西脇紀恵) ★脚力維持に毎日5Kmを歩き、年3回の旅は栄養剤だ。4月は九州

25,000kmをドライブ、7月は外国の海拔4,000mを歩き、10月は50年前に初登山した山を久しぶりに歩く。(10/西尾康弘)

★早や、8ヶ月、住んでみたくて来た沖縄です。のどかな毎日です。東雲会の盛会を祈り、山脈10回の皆様、この次お会いできる日を楽しみしております。(10/岡村紀久子) ★母親と老ネコたちの介護で忙しくして

ます。次年度の総会には是非、出席したいと願っています。(11/光岡喜久代) ★当分、都合が悪く参加できません。プレトニゾロンというステロイド剤

(錠剤)2.5錠に減りましたがまだ先は長そうですが、頑張ります。(11/澤田和子) ★次女の出産手伝いのため、しばらくアメリカに行っていましたの



で連絡が遅くなり申し訳ありません。ご盛会をお祈りいたしております。(12／永山知江子) ★70歳に近づき日々衰えを感じます。わが身大事と日々のウォーキングと週2回のプールに頑張っています。(13／佐々木冴子) ★69歳になりましたが、元気で染色作品を製作し、全国のデパートの「職人展」等に出品する日々を送っています。(13／佐武将章) ★今年4月兄弟5人で近江八幡、彦根長浜を旅行しました。鳥取も何か目玉を持った街づくりをすれば観光客も増えるのでは?と、思いつつのんびり歩いてきました。(17／浜野純郎) ★しばらく休んでいた登山を今夏からはじめました。八ヶ岳へ登り自然を満喫してきました。苦しい登りも登りきれば満足感で一杯!60半ばを過ぎましたがこれからもまだ元気で挑戦していきたいと思います。(17／和田節子) ★退職して2年半になります。パン教室に行き1年半で講師の資格をとりました。昨年までは月に一度田舎へ帰ることで母親孝行と思っていましたが、母も入院して今は2週間に一度病院に行っています。(19／吉村律子) ★今年はとにかく節電につとめました。ゴーヤのエコすだれ、クーラー不使用…。これからもエコ生活に工夫しながら続けていきます。節電効果は約10%でした。(20／秋田幸子) ★昨年還暦を記念した山脈21回の同窓会に参加しても楽しいひとときを過ごしました。翌日は久しぶりに砂丘に行き鳥取を満喫しました。これから第2の青春です。(21／井上由利子) ★卒業して35年子育ても終わり、26歳の息子は主人の会社で編集の仕事をし、19歳の娘は鳥取大学医学部に通っています。大阪育ちの娘ですが鳥取が大好きで、将来、鳥取で医師として役立ちたいと言っています。鳥取はほんとうにすばらしいところです。帰鳥する度に心が安らぎます。老後は鳥取で暮らせたら…と思っています。(28／細田陽子)

むかひばなし

濱本 英子（山脈 2回）

私は昭和廿年に憧れの鳥取高女に入学し、その八月に終戦を迎えた世代です。八〇歳の現在も同期生は“はたち会”として集まっています。

ようやく落ち着いて来た頃、戦後の教育制度は猫の目のように変り、女学校三年の時一旦卒業證書が出され、女学校卒業の資格が与えられるとの説明でした。こゝで一部就職する人もありました。大部分の



人はそのまま、進級して第三高等学校の一年生になりました。

この時一般入試で入って来た人、八頭高から編入の人もクラスに三、四人ありました。

その次は男女共学と学区制です。通いなれた女学校を出て行くのは悲しかったのですが、西高に残るには商業科に行くしかなかったのです。

進級しないでこの機会に退学した方もありました。私の母も“女の子を高校へ行かせるなんて”と非難されたそうです。

廿四年に東高二年生として旧二中の校舎に入学しましたが、早速机や椅子が足りなくて、旧鎧物町（現在は寿町）の市女の校舎から大勢の男女学生が立川の東高まで末広通りを運びました。私も椅子一つを持って歩きましたが、それはそれは大変でした。現在では考えられません。このスタートもクラス分けでもたつきました。取り敢えず“ホームルーム制”で朝の一時間を二、三年生合同で過ごす新しい体験をしました。

男子学生とは親しく話しをする事なく卒業してしまいましたが、今になると懐かしい思い出です。結婚で大阪に来ましたが、便利の良い所にありますので御案内があれば喜んで出かけます。

旧高女の翠紅会も“二条のがんこ”を定例会場に数回開催しました。旧姓角倉様の御縁のようで、庭の散策も優雅で癒されました。この会も先輩方が九十歳台で自然消滅になりました。

近畿の同窓会は東も西も出席しますが、昨年からは同期の方が癌の宣告を受けてこれから入院なので今の中に美味しい物を食べたいからつき合えとの事で体調を考慮し乍ら集まりますが、逢う度に痛々しく細くなって行かれるのは辛いものがあります。どうにか地域のお役にも立て、遠出も一人で段取りできる幸せをかみしめております昨今です。

新しい『京阪神東雲の窓』

京阪神東雲会のホームページ『京阪神東雲の窓』のジャンプ先が変わりました

当面は旧アドレスからも変更先がわかります。

新しいアドレスは、

<http://www.ab.auone-net.jp/~sinonome/>

です。湯村（山脈28回）さんが、担当します。

京阪神東雲情報や、「交流室ボード」への近況や話題の書き込みをお楽しみ下さい。

たががマラソン されどマラソン

橋 本 巖 (山脈 10回)
最終回

拙いマラソンエッセーも今回で最終回となった。上林前会長（現顧問）から「マラソンについて会報に書いてくれないか。5回分だ」と命令されたのは5年前のことだった。「分かった」と安請け合いしたもの、考えてみると5年は生きねばならないということだった。72歳まで果たして原稿が書けるほど健康であるかは保証の限りではないが、まあ生きる目標が出来たと思えば悪くはない、と考えた次第である。今回、やっと責任を果たせて安堵しているところだ。お付き合い頂いた諸兄姉に、心からお礼を申し上げたい。

空前のマラソンブーム

今日、マラソンは大変なブームだ。老いも若きも走る。大都市のマラソンは、当選は狭き門だ。人気の大会は、受付開始数時間後には定員オーバーになる。ネットで申し込まない時代遅れの筆者など、完全にはじき飛ばされている。定員オーバーなど考えられなかつた今年3月の「鳥取マラソン」でも、締め切り1ヶ月前に定員に達した。お陰で、高をくくっていた筆者の連続出場も途絶えてしまった。

大会だけではない。日常のトレーニングでも皇居を一周するコースでは、夕方になると勤め帰りの人人が殺到、交通整理が必要なほどの混雑だそうだ。

なぜ、こんなにも走る人が増えるのだろう。動機は様々だが、「健康のために走る」というよりも「お好みのウエアで格好良く走ってみたい」という女性が増えていることは確かだ。プロ野球では、最肩球団のユニフォームに着替えて球場で熱狂するファンが大勢いるが、ランニングやマラソンも同じだと思う。非日常の場所で日頃のストレスを発散させ、開放感を味わうということだろう。タイムや順位などどうでもよいのだ。斯くて、そういう女性を目当てに、男たちも集まる、という現象だろう。

まあ、理由はどうあれ、走る人が増えることは、同じ愛好者として大歓迎だ。

走ることは人間の証明である

一般に、走ることは「嫌いだ」「苦手だ」という人が多い。これは、順位やタイムを競い、「速いことは



良いことだ」と教え込んできた体育教育の弊害である。

なぜ、走ることは健康によい、走ることはすべてのスポーツの基礎である、と教えないのか。もっと言えば、走ることは生きること、人類が今日あるのは先祖が走ることを身につけたからだ、と教えないのか。地球の大地に生息する動物はすべて走る。食べるため走り、敵から逃れるために走るのだ。走れない動物は、生存することはあたわない。とりわけ人類は、他の動物と違って持久走に優れていた。二足歩行がそれを可能にしたのだが、じっくりと獲物を追跡する能力に優れていたから地球上の支配者になれたのだ。

同じ人類でもネアンデルタール人は、現代人の先祖より体力（知能も？）は優れていたが生き延びることは出来なかつた。それは持久走が不得手だったから獲物を捕獲できなかつた、という説がある。なぜ、走れなかつたのか。それは踵のある骨がなかつたからである。今、その研究が進められている。

理屈はともあれ、走ること、走ることを目的に走ることが出来るのは、人間だけである。

ジョギング・マラソンの特異性

ジョギング・マラソンが敬遠されてきた理由に、「しんどい」「面白くない」「ダサイ」というのがある。「ダサイ」というのはウエアがカラフルになり女性が進出したことで克服された。他の理由は、好みや価値観の問題に過ぎない。

少し考えてみると、走ることつまりジョギング・マラソンには、他のスポーツにはない特異な優位性があることが判る。

まず、教わらなくても誰でも走れるということだ（野球、水泳、ゴルフ等他のすべてのスポーツは基本を教わらなければ何も出来ないばかりか危険もある）。そして、ジョギングは、プールも体育館もコートも必要としない。シューズとウエアさえあれば、家を一步出ればそこがフィールドである。それも無料の。つまり、何時でも、誰でも、どこでも可能なのがジョギングなのである。

とりわけ、仕事が忙しい人にとってジョギングは、もってこいである。筆者は、暇になった現在は怠けてしまって3日に1回ほどしか走らないが、勤務していた時は毎朝30分走っていた。ノーベル賞を受賞した山中伸弥さんは、研究の合間に走っている。作家の村上春樹さんは、毎日1時間走る（もし、彼が今年ノーベル文学賞を受賞すれば、ジョギング・マラソンのブームはまたまた加熱するだろう）。

ただ、マラソン大会は、何時でもというわけにはいかない。しかし、年間を通じて日・祝祭日には日本のどこかでレースが行われている。ごく一部の大会を除けば、誰でも参加できる。しかも、老若男女が同時に楽しむことが可能だ。こんなスポーツが他にあるかと言えば、探す方が難しい。

マラソンで得たもの

マラソンを始めて、23年になった。マラソンで得たものは何か、と考えることがある。

マラソン大会参加状況

3~16km	62回
ハーフマラソン	56回
37km	1回
フルマラソン	46回（リタイア2回）
ウルトラマラソン	13回（リタイア4回）

- ・普通マラソン大会というのはハーフ以上である。
- ・ウルトラマラソンの参加は60~140kmのもの。

第一は、健康である。この間2度入院したが、ウイルスに起因するもので慢性疾患はない。次ぎに、友達である。多くの仲間が出来た。とりわけ、ウルトラマラソンでは、各地に現在も交流している人がいる。「旅は道連れ」というが、同じ宿に泊まって長丁場を走るから、完走しようが失敗しようが関係なく、親近感が湧く。

しかし、健康や友達が出来ることは、他のスポーツでも変わりないだろう。一番良かったと思うのは、時間の管理だ。フルマラソン以上のレースになると、時間配分は決定的に重要である。ゴール予想タイムを設定、時には閑門の制限時間を頭の片隅に置きながらペース配分を行わねばならない。この経験は、仕事にも応用できた。とりわけ、締め切りのある仕事では、自分の能力を考えながら、調査に必要な時間なども考慮して取り組むことが出来たし、今でも役に立っている。

歩けるうちは走る

今72歳。何歳まで生きられるか判らないし、何歳まで走れるか判らない。が、目標は持っている。当面は、75歳でフルマラソン50回完走だ。走り友達の間では「子どもの目標」に過ぎないが、一つの峰で節目の記録もある。あと6回だから、可能性はまだと思っている。

問題はその後だ。何歳まで走れるか、それは神のみぞ知る。しかし、歩けるうちは多分走るだろう。市民マラソンランナーの意地であり使命でもある、と密かに決意している。【写真：淀川リレーマラソン2012.10.14】

ワーキングマザーとして 走り続けて！

西川 尚子（山脈22回）

看護師として37年勤務し、近畿中央病院の副看護部長職を最後に今年3月無事定年退職しました。

女性を取り巻く環境はこの20年で大きく変わってきた。ワーク・ライフ・バランスが推進され、女性の社会参画は当たり前になり、働きやすい職場環境づくりが積極的に取り組まれています。



私が仕事をする中で、一番のターニングポイントは出産だったと思います。夜勤がある看護師の仕事特性を考えると、仕事と育児の両立は可能なのだろうか。仕事を続けるべきか、子育てを優先するべきか、苦悩・葛藤の時期はありました。多くの人々に支えられ今日を迎えることが出来ました。長年働いた達成感は感慨深いものがあります。ワーキングマザーとして走り続け、無事退職を迎えた今の思いをまとめました。

看護の道を選んだきっかけ

私は幼い頃から看護師になりたいと思っていた訳ではありません。

4人姉妹の中で育った私に、父はこんなことを言っていました。「これからは女人も社会進出する時代が来るよ。結婚して家庭を持つことはもちろんだけど、女性として自立できる仕事を見つけなさい。そして、親のありがたさや他人の優しさが解るから、一回は親元を離れ、自分で生活しなさい。苦労することも財産になるから。」

高校入学後も、具体的にどんな仕事に就きたいのか決めてはいませんでした。何でもいいから手に職をつけ、資格の取れる学校にしようかなと漠然と考えている程度でした。

看護の道を決定づけたのは、高校時代、半年の間に両親が入院、手術を受けたことでした。見舞いに行

くと、テキパキと注射や処置をする看護師さんの姿に魅力を感じたのだと思います。よもや看護師の仕事を今まで続けていくなんて思ってもいませんでした。

突然の婦長昇格

出産し、1年間の育児休暇を取得しようと考えていた私にとんでもないことが起きました。上司である看護婦長（看護師と呼ばれるようになったのは2002年3月）が定年まで5年を残し急に退職することになったのです。出産後看護部長室に報告に行くと、「4月から外科病棟の婦長をやって欲しい。」と言われたのです。「乳飲み子を抱えこの先どうなるか解らない立場の私に何を言うのよ！」「何故今の時期なの？」というのが率直な気持ちでした。キャリアアップというより、これから仕事の重さと子育てのことを考えると不安でいっぱいでした。

今では高齢出産は当たり前ですが、当時、私は初産婦で38歳でした。ましてや病棟婦長として責務を遂行し働き続けるには家族のサポートが必須でした。

「そんなチャンスは来るもんじゃないよ」「出来るかぎり協力するから」と夫の言葉や、周囲の人達に後押しされ、出産後9週間で職場復帰しました。今までも上司不在時は代理業務を行っていたとはいえ、これからは責任者として病棟全体を管理しなければならない責任が重くのしかかっていました。1ヶ月間で師長としての看護管理教育を受け、生後3ヶ月の子供を急遽、義母に預けてワーキングマザーとして仕事と育児の両立が始まったのです。

仕事と育児の両立

仕事を続けることを決定後は子供の保育所を探しから始めました。0歳の子供を預かる保育所は少なく、自治体に申請し、結果を待ちました。幸い6ヶ月で預かってくれる保育所が見つかったのですが、保育所が預かってくれる時間は8時から18時、場所も校区外であり、車で15分はかかりました。当時、病院の始業開始は8時と随分早い時間で、本当に送り迎えには苦労しました。7時30分には保育所に行き、いつも早く来て待って下さる園長先生に預け、いつも駆け足で勤務先に向かっていました。迎えの時間も思い通りにはいきません。病棟で緊急事態が発生すれば、迎えだからと一人さっさと帰れない。延長保育を活用しても、時間に間に合わないことも度々ありました。

仕事と育児の両立にあたり一番苦労したのは子供が病気になった時かもしれません。最初は夫と私のどちらが仕事を休んで子供の面倒を見るか話し合いか

らスタートです。調整が可能な時は良いのですが、夜中に突如熱が出た時は最悪でした。私が朝5時に職場に行き、病棟管理上必要な業務調整や書類整理を行い、仕事の段取りをして休むこともありました。また、感染症で何日間か続く場合は、お互いそんなに長く休めない。田舎の母や、姉妹、友達、本当にたくさんの人達に協力してもらいました。時には座薬をいれて熱が出ないように姑息的手段で保育所に預けることもあります。結局昼前に電話で呼び出しされるのですが・・。保育所時代の6年間は毎日が綱渡りの連続だったと思います。

仕事と育児のバランスが上手くいった今だからいえることですが①子育てをして私の人生は豊かになった。②親として人間として成長出来た。③人生観が変わった。当時の苦労は吹き飛びます。

オーストリアの精神分析学者ジークムント・フロイトの言葉を思い出します。

『人生において、大切なこと・・。それは愛することと、働くことです。』

忘れられない患者さん

何人の患者さんとの出会いがあったのだろう。何人の患者さんの死と向き合ったのだろう。メッセージには、患者さんが今まで歩まれた人間の生き方が表されています。

元教師のAさん：

肺がんの転移巣が増え、病状が悪化の説明を受けた後言われた言葉「がん細胞一つひとつが自分の子供のように愛おしいんです。」

社長のBさん：

膀胱がんで余命1年と告げられた後も、病室に伺うと言われた言葉「今日もこうして朝を迎えられこと、生かしていただいたことに毎日感謝だよ。この生命を粗末には出来ないな。」

看護の醍醐味は、直接患者さんの回復過程に立ち会い、その過程で苦しみや喜びに共感し、患者さんの人生を丸ごと受け止め、相互の関係の中で自分自身も成長できることかもしれません。看護の現場はまさに人生の縮図です。看護という職業を選択したからこそ、かけがえのない経験ができたと感謝の気持ちでいっぱいです。

第二の人生に向けて

日本で65歳以上人口比率は2035年には33.7%を占めると言われています。ますます高齢化が進むと、医療、福祉、介護分野に大きな役割が課せられてきます。今まで以上に仕事の充実を目指し、更に自己実現していきたいと考えています。

N君との出会いから 学んだこと

山邊 英子（山脈 28回）

私のライフワーク、ボランティア活動を振り返ってみました。

13年前、近所に住む当時小学4年生のNくん。彼は重い心臓疾患を抱える病弱な少年でした。Nくんの兄は、私の次男と同級生。このNくんのお母さんとの立ち話から、当時主婦の私はNくんの学習の手伝いをすることになりました。彼はその疾患のため、学校を長期欠席することが多かった。その彼を9歳から18歳での高卒認定試験までの9年間、週一回のペースで学校の勉強を見てあげました。

私は、このことがきっかけで、某フリースクールの学習ボランティア・非常勤スタッフに誘われ、8年間勤めました。同時に、地域民生児童委員を4年間務めさせていただきました。現在は、亡き姑の後を引継ぎ、保護司を拝命、6年が経ちました。これらの活動を続けられたのは、「何事も社会勉強、やってみなさい」という亡き姑の後押し、更に家族の理解・精神的支えがあったおかげです。乳幼児喘息の持病のあった次男が高校2年生頃から元気になったことも、自分の時間が持てた意味で大きな要因でしたが。勿論、私自身、地域に社会貢献をしたい、社会との繋がりを持ちたいという気持ちが強くありました。これらのボランティア活動は、紆余曲折を経て、保護司という形で今日に至っています。（ご存知の方も多いと思いますが、保護司は、刑務所や少年院を出て、「保護観察」を受けることになった人たちに関わる、民間のボランティアです）保護司ボランティア活動は、保護観察所の指導、保護司先輩の方々の助言、また地域の方々の理解によって支えられ成り立っています。

さて、ボランティア活動の中で、心がけているこ

とがあります。それは、等身大の正直な気持ちで相手に接することです。誠意をもって接すれば、投げたボールは返ってきて、心と心のキャッチボールができます。しかし、対象者によっては、どのように接するべきか悩むこともあります。その時に役に立つのが（大学教育で得た教養・書物で学んだこと・周りの方々の助言・過去の子育て経験・音楽スポーツ等様々な分野の話題はもちろんですが）、高校三年間の教育で学んだ論理的思考・倫理観です。活動の岐路に立つ時、客観的に事実を捉えようと心掛ける姿勢は、高校時代における教育の賜物と感謝しています。とは言え、ボランティア活動は、山あり谷ありの連続ですが。

話はN君の事に戻ります。幼稚園の年長時、東京女子医科大学で難しい心臓の手術を受けたNくんは、高卒認定試験合格後、アニメ作家を目指して専門学校で頑張っていました。しかし、体力的限界には勝てず、専門学校をやむをえず中退。今は、奈良の福祉関係の会社で、パソコン業務やパン販売をしています。昨日偶然、お母さんと本人に会いました。Nくんは、レジ・接客・後輩指導も任されるようになったとのこと。元気に通勤するスーツ姿のNくん。足掛け10年、私の家に来て勉強をしながら、将来の悩み・夢を語ってくれたNくん。10代後半頃には、

「生かされたこの命、何か人の役に立つことに使いたい」と今後の生き方を熱く語ってくれました。彼は、2年前に無事に成人式を迎えました。よくぞここまで成長してくれたと目頭が熱くなります。私のボランティア人生スタートのきっかけになってくれたNくん。彼と出会ったお陰で、私はボランティア活動を始めることになりました。また、様々な人々と出会うことができました。

鳥取東高等学校を卒業後早や38年が経とうとしています。高校時代は、遠い昔のはずですが、ついこの前のことであったような気もいたします。今年4月に次男と帰省し、鳥取駅に向かう際、タクシー運転手の方に高校前の桜並木を通って貰いました。変わらない懐かしい風景でした。フロントガラスに、風で舞い上がる桜の花びら。高校時代の想い出が走馬灯のように駆け巡りました。多感な高校時代を鳥

取東高等学校で過ごすことが出来たこと、当時の先生方・友人から多くを学べたことは、私の一生の財産です。そして、その後奈良という地に嫁ぎNくんをはじめ様々な人々と出会えたことに、また、一昨年は京阪神東雲会幹事年に、同窓会先輩後輩の方々との出会い、同窓生との再会の機会をいただいたことに感謝をいたします。奈良という地で、今後もボランティア活動を続ける勇気が湧いてまいりました。【写真：所属している奈良地区保護司会の第63回“社会を明るくする運動”の啓発活動のパレード】



平成24年度会計報告				(単位円)
費目	収入	支出	残高	備考
前年度繰越金	63,518			
総会会費	630,000			
総会支出		595,110		会場支払商品代
会議費(封入作業含む)		22,474		
連絡通信費		4,600		切手、葉書他
総会資料作成費		5,828		印刷・用紙代他
寄付金会計へ繰出		15,506		
合計	693,518	643,518	50,000	
平成24年度寄付金会計	2012/4/1~2013/3/31			
費目	収入	支出	残高	備考
前年度繰越金	158,452			
平成24年度寄付金収入	167,080			3/31現在159件
総会当日入金分	75,000			75件
総会関係会計より繰入	15,506			
振込用紙印字サービス		700		
24年度総会案内送料		45,600		
出欠葉書代570×@50		28,500		
データ管理費(金井氏へ)		100,000		
振込料		300		
総会案内会報印刷代		38,142		
運賃送料		2,870		
平成24年度総会補填		0		
会報編集通信費		1,000		
本部総会出席費用		10,000		
合計	416,038	227,112	188,926	

野田幸生顧問のご逝去を悼みます

岡田 俊一 (京阪神東雲会会長)

総会へ向け 7月に開催の当会理事会の招集葉書を出しましたが、野田さんの奥様から 5月 6日にお亡くなりになつた旨の連絡を頂きました。

聞けば生前から自分の葬儀への会葬御礼の文章も準備をされていたとのことでした。

奥様の了解を得て挨拶文の一部を紹介します。

一九三五年この世に生を受けて以来六年の幼児期、十六年の学校生活 四十五年の会社生活 その後の一〇年の地元中心の生活を通じ 先生上司 先輩 同僚 友人 近隣の方々 家族等多くの皆さまに支えられて七十有余年自分なりに充実した生涯であったと感謝の気持ちでいっぱいあります 厚く御礼申しあげます

二〇一一年一月に診断が確定して以来身の回りの整理を進め 葬儀については ご迷惑を顧みず 棺の中から御礼とお別れを申し上げ人生のけじめにしたいと考えました

名残は尽きませんが 皆様のご健康・ご多幸をお祈りし お礼とお別れのご挨拶とします

奥様によれば、最後の 40 日余りは病院を出て自宅で静かに過ごすことができたとのこと。あらためてご冥福をお祈りいたします。

古代東高史 (創刊号~9号)

倉恒先生の掲載を PDF 化して電子書籍としてスマートフォンや ipad でも見られます。下記 url にアクセスをしてください。

<http://okada.sub.jp/pic/kodaihigashi.pdf>

また冊子化の方法については、当会ホームページにご案内しております。

詳しくは当会ホームページでお知らせします。

編集後記

☆彡 今年も総会の時期になりました。各回生ごとにテーブルをセットしております。ぜひとも、同期会に総会を利用して、連絡を取り合ってぜひとも総会にご参加を下さい。

☆彡 広報紙の活性化へ向けて、編集のお手伝いをして頂ける方を募集します。また、次号は、「私とボランティア」というテーマで広く会員の皆さまの原稿をお待ちしています。興味のある方は、岡田(連絡先はタイトル横に住所を記載)までご連絡下さい。

☆彡 広報紙発行と総会の御案内費用捻出のため、今年も会費・寄付金 1 口(1000 円)以上をお願いいたします。広報紙送付と総会の御案内の郵送料・当会の運営維持費に補填しています。

☆彡 橋本巖(山脈 10 回)さんが本を出版され同窓会総会当日に何部か持参されます。

興味のある方はぜひお買いもとめ下さい。

タイトル『その昔大地震があった～鳥取地震そして湖南地域の被害と記憶』著者：橋本巖/鳥取今井書店出版企画室/税込み 800 円/今年の 9 月 10 日は鳥取地震から 70 年になります。旧鳥取市の全・半壊率は 90 数%、死者は 1210 人というものでしたが、戦時中だったため真相は明らかになっていません。東高の前身 2 中は、校舎の倒壊は免れたものの、寄宿舎と柔道場が全壊しました。鳥取地震の全体像と湖南地域の被害の実態を纏めました。

第 1 章 鳥取地震の概要

第 2 章 戦時下における地震災害の悲哀

第 3 章 二つの地震断層と湖南地域の被害と記憶

第 4 章 座談会～鳥取地震の記憶を語る

☆彡 カットは山崎勝彦氏(山脈 12 回)にお願いをしました。
(お)